

Title	「アンナ カレーニナ」題銘考
Author(s)	法橋, 和彦
Citation	大阪外国語大学学報. 12 p.61-p.78
Issue Date	1962-12-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80207
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「アンナ カレーニナ」 題 銘 考

法 橋 和 彦

НЕКОТОРЫЕ НАБЛЮДЕНИЯ НАД СМЫСЛОМ ЭПИГРАФА К «АННЕ КАРЕНИНОЙ»

ХОКИО КАДЗУХИКО

Эпиграф к «Анне Карениной» — «Мне отмщение, и аз воздам» — в раннем варианте (1873) написан так: «Отмщение мое». Это, очевидно, сокращенная запись, начерно. Но такая редакция, не существует ни в Библии, ни в Евангелии — ни на церковнославянском, ни на русском языке.

В период работы над эпилогом «Войны и мира» (1869) Толстой жадно читал Шопенгауэра в подлиннике. «Мир как воля и представление» есть глава (§62), трактующая о юридических понятиях. Тут же идет речь о понятиях наказания и мести. Шопенгауэр утверждает, что «воздаяние злом за зло, без дальнейших видов, ни морально, ни каким-либо иным разумным основанием оправдано быть не может...». В этом заключении он ссылаясь на евангельское изречение. В немецком тексте это звучит так: «Mein ist die Rache, spricht der Herr, und ich will vergelten». Толстой просто перевел начало изречения с немецкого: «Отмщение мое». Это — история происхождения эпиграфа к «Анне Карениной».

Когда Толстым был подготовлен первоначальный замысел «Анны Карениной» как любовного романа, он считал вслед за Шопенгауэром, что преступная женщина погибнет сама — не от человеческой руки, а от божьей.

Ближайшим, непосредственным толчком к тому, чтобы начать любовный роман, была, по-видимому, книга Дюма-сына «L'homme-femme». Дюма в этой книге говорил о женщине, которая изменяет мужу и бросает его и детей. Он проповедовал свою мораль: «убей канюшую самку». Книга Дюма поразила Толстого (1873-3). Взгляд Дюма на эту тему, противоречил взглядам Толстого, и должен был вызвать возражение. Это — первоначальный смысл эпиграфа.

В процессе работы над «Анной Карениной», сюжет романа и образы менялись, становясь более сложными и освобождаясь от связи с трактатом Дюма, но эпиграф оставался, становясь несколько загадочным.

Из «отвратительной женщины», губившей жизнь и деятельность своего мужа, Анна превратилась в другую — несчастную, страдающую, «потерявшую себя» женщину. Как же мог остаться эпиграф и что же он значит?

Истолковать смысл эпиграфа в окончательном тексте, его целом содержании — центральная проблема эстетики «Анны Карениной». Мы здесь рассматриваем судьбу Анны в связи с эпиграфом с точки зрения самого Толстого о женском вопросе.

「幸福な人々の生活に面白いもののあったためしがない。」これは、レールモンツフの『不思議な男』のなかの言葉である。トルストイの『アンナ カレーニナ』の書きだしも、これに似た^{アフオリズム}警句の発想をもっている。「幸福な家庭はすべてたがいに似かよっているけれども、不幸な家庭はどれもそれぞれに不幸である。」

周知のように、この書きだしにはじまる『アンナ カレーニナ』の悲劇的葛藤の基礎には、＜カレーニン——アンナ＞、＜ヴロンスキ——アンナ＞、＜スチーヴァ（アンナの兄）——ドーリャ＞、＜レーヴィン（スチーヴァの友）——キティ＞という四家庭の生活が設定されている。これら四家庭の生活形象は、それぞれちがった意味において不幸である。

『アンナ カレーニナ』において、トルストイが注目した＜不幸な家庭＞は、彼の20年にわたる創作活動を通じて、はじめて顕在化したテーマである。

処女作『幼年時代』（1852）における自足的な田園内部の牧歌的家庭生活、農奴制的諸関係の外部における人間集団『コサック』（1852—1862）において展開されるであろうマリヤーナの家庭生活、『家庭生活の幸福』（1859）で追求される地主家庭の理想的女性像、さらに『戦争と平和』（1863—1869）のエピローグに語られる＜ニコライとマリヤ＞＜ピエールとナターシャ＞、この二組の家庭生活——これらは、作者が想定する幸福な家庭生活のイメージにおいて、＜すべてたがいに似かよっている＞。

たしかに、トルストイは70年代の『アンナ カレーニナ』において、＜不幸な家庭＞のテーマを作品に導入した。^{アフオリズム}警句の発想をもつ小説の冒頭の言葉は、作者がこれまで、ひとすじに、＜幸福な家庭＞の形象を追いもとめてきたことをもあわせて強調している。

この観点からすれば、＜幸福な家庭＞と＜不幸な家庭＞という対句は、トルストイの創造的志向が、その幸福と不幸とを問わず、共通して家庭生活に対する問題意識とたたかぬあわされていることを暗示している。しかしながらこの対句は、『アンナ カレーニナ』における問題意識の重点が、その警句的発想において、より多く＜不幸な家庭＞にかかっていることを打ち消すものではない。

トルストイは『アンナ カレーニナ』を契機として、＜幸福な家庭＞から＜不幸な家庭＞へと、その主導的なテーマにおいて移行をとげた。この移行の特に鮮明な標識は、作品に付された《復讐は我にあり、我これに報いん》^{エピソード}という題銘である。

作品に題銘として福音書（ロマ書 第12章 第19節）の言葉を冠すること——これも、トルストイの作家生活を通じて、はじめての試みであった。この試みは、『アンナ カレーニナ』におい

て、はじめて＜不幸な家庭＞のテーマが顕在化しえたという事実と深い地点で結びついている。

悲劇『アンナ カレーニナ』における不幸のテーマと聖書に^{エピソード}出題する題銘は、70年代末—80年代初頭におけるトルストイの転機への必然性を指向するともにはじめての出来事であった。これらは、トルストイの精神的危機、信仰の覚醒、農民的世界観への移向を準備する序曲としての『アンナ カレーニナ』にふさわしい旋律の主導モチーフをなしている。アンナのプロットと対照的に、作者が＜幸福な家庭＞形象の追求を志向した＜レーヴィン——キティ＞の家庭生活も、それがトルストイ的主人公レーヴィンの精神的苦悩の異常な振幅の死点であるかぎり、不幸に例外はないのである。

『アンナ カレーニナ』以後、トルストイの家庭生活に対する問題意識は、より深く＜不幸な家庭＞の側へと傾斜していく。

『閨の力』（1886）においては、不可抗的に資本主義的諸関係に侵蝕される後進的なロシア農村を舞台に、姦通、殺人、嬰兒殺しが、『クロイツェル ソナタ』（1887—1889）においては、不貞の妻を刺殺する夫の悲劇的な家庭生活の深淵が、『イワン イリッチの死』（1886）においては、一介の俗吏の死に対する不安、恐怖、懊悩、回心の諸相を通して、家庭生活に巢喰う一切の日常性と魂の荒廃の深い社会的基盤があらわされる。『生ける屍』（1900）、『復活』（1889—1900）においても、＜幸福な家庭＞のテーマは、すでに遠き彼方へと没しきっている。

これに符節して、トルストイは『アンナ カレーニナ』以後、＜不幸な家庭＞をテーマとする作品には、かならず聖書から^{エピソード}題銘を採録し、それを巻頭に飾ることをならわしとした。作品巻頭の^{エピソード}題銘は、作品の芸術的主題とは別個に、作者の不幸なテーマへの意図を説示する特別のコラムとしての意義をしだいに獲得するようになる。

2

『アンナ カレーニナ』以前の作品において、＜幸福な家庭＞のテーマが追求されたことは先のべたとおりである。

かかるテーマにおける作品は、一般に、トルストイによる肯定的な女性像の創造をめきにしては成立しえない性質のものである。なお一步をすすめて言えば、＜幸福な家庭＞における女性像は、自伝的なトルストイ的主人公の世界理解、かくあるべき世界秩序の実現希求にそって、ある過去の家庭形象から、より具体的に、現実において顕示されねばならぬという、作者の熾烈な要請にもとづいて創造されている。

彼女達は＜かくありえた世界＞において＜かく実在した＞女性である。と同時に、トルストイ的主人公が＜かくあるべき世界＞の不可欠な家族構成員として、＜かくあるべき姿＞において想

定する女性でもある。

処女作『幼年時代』において＜かく実在した＞女性は――地主家庭の主婦であるよりも、あらゆる人間美德の化身であるようなく微笑の美しい>① ママンである。このママンの像には、農奴身分の女中頭であるよりも、主家に対する忠誠と幼き家族構成員に対する愛情を唯一の人間的使命と考えた英雄的なナターリヤ サーヴィシナの像が不可分に結びついている。ママンとナターリヤの像にむすばれた家庭生活における人間関係は、事実トルストイの幼少期にあって、もっとも純粋な痕跡を次のような形にとどめている。

「僕は乳母^{ばあや}を愛している、乳母^{ばあや}は僕とミーチェンカを愛している、僕もミーチェンカを愛している、ミーチェンカは僕と乳母^{ばあや}を愛している。乳母^{ばあや}はタラスを愛している、僕もタラスを愛している、ミーチェンカもそうだ。タラスは僕と乳母^{ばあや}を愛している。ママは僕と乳母^{ばあや}を愛している、また乳母^{ばあや}はママを、僕をもパパをも愛している、こうして誰もが愛しあっている、誰もが満足しあっている。」②

しかしながら、＜かくありえた世界＞を一步そとにすると、トルストイの幼少期における＜すべて世はこともなき>③ 牧歌的家庭にも、農村経営者としての父を頂点とする農奴制的社会機構の非人間性が、＜微笑のためにきずつけられる醜い顔>④ をのぞかせている。

幼年の主人公には、こうした微笑にゆがむ＜醜い顔>が一時的な紛争の結果にすぎず、望みさえすればこの紛争を回避することも容易である、と思われる。彼は、＜誰もが愛しあっている、誰もが満足しあっている>＜微笑の美しい>世界こそ、世界の正常な規範であり、この世界に紛争の不安と悲哀をもちこむ＜醜い顔>が、正常な規範からの例外的変則にすぎないことをたしかめようとする。

しかし一方、彼は＜醜い顔>をたえず発見し、その存在を意識することによって、異常な緊迫感にさらされている。彼は、こうした不安と緊張にたえがたく身をおくとき、＜微笑の美しい>世界の愛情に対しても、自己の不信の影を投ぜずにはいられない。

彼の不信の表白、自己の差別と不公平に関する被害意識は、この世界の内部の人間には無縁な感情である。この世界の感情は、それが彼の仮想的な自家撞著にすぎぬことをあらためて立証した。だが、彼はすでに一度ならず、＜誰もが愛しあい、誰もが満足しあっている>世界のかくれた深層に、農奴制度そのものの非人間性を漠然と感知し、自己の周囲の人間関係にあまねく懷疑の矢を射こむ。懷疑の矢を射こむことによって、彼がかかる世界の内部の人間でないこと、またあわせて、彼がかかる世界の人間関係に自己の全存在をすなおにゆだねえない人間であることを、はやくも悲しい思い出⑤ として認めなければならなかった。

ママンとナターリヤの死を契機として、この世界は後退していく。だが、この世界の後退をよ

ぎなくさせる無慈悲な力は、醜惡な農奴制的諸關係それ自体の内部における發展力ではない。それは主人公に、いまだ未知なる闇の力である。農奴制的諸關係の＜醜い顔＞が、しだいにその非人間的な全貌をあらわにみせるのも、まさにこの未知の力の、しのびやかな地主生活への滲透によるものである。

その精神生活において自伝的なトルストイ的主人公は、この未知の力の脅威にさらされた世界に生きている。彼等は、茫洋として未定形な青年時代において、あるいは破廉恥にこの世界の余計者として自己を埋没しやり、あるいは決然としてこの世界を変革する方途を模索する。

「現在の窮状を打開するための三つの手段、1) 賭博者の群に投じ、金を懷にして運をかけること、2) 上流社会に出入りし、確実な条件で結婚すること、3) 有利な勤めぐちをみつけないこと」^⑥——をまじめに考えるトルストイは、また「社会（都市貴族の）から隔絶して自分自身に沈潜し」^⑦「人生の目的はあらゆる存在の全面的發達に対する能うかぎりの貢獻である……今こそ僕の生活は、この唯一の目的への不斷の勤勉なる精進である」^⑧——と結論するトルストイでもある。

トルストイにおける人生いかに生きるべきかの精神的葛藤は、たとえば『ゲームとりの手記』（1853）、『地主の朝』（1852—1856）のネフリュードフと『コサック』のオレーニンの間によこたわる深淵——出口のない死となにかある志向に導かれる生への出口——にかけられた魂のドラマチズムとしてひらき示される。前者において彼は悲劇的であり、後者において彼は叙事詩的である。彼は悲劇的なものの渦中であって、叙事詩的なものへの志向を、＜不斷の勤勉なる精進＞——自己完成のための点検と課定の日記において確認しつつ、さらに、現在の自分を導きだしてくれるであろうような叙事詩的基盤を、自伝的過去の生活史にもとおりだすねたのである。

したがって彼の創造的といふのは、＜いまの自分を導きだしてくれるであろうような、なにかある基盤と志向を、自分の過去の生活の足跡のなかからみいだす＞^⑨ ための一つの手段にほかならなかった。この意味において、トルストイを作家の道に立たす唯一の推進力となった青春時代の日記の役割は重要である。彼は、＜微笑の美しい＞世界の内部の人間でありえなかったことによって、自己完成のための日記を日課とし、そこに＜複雑で不調和で醜惡な＞^⑩ 自己の生活形象を、その細部にいたるまでなまなましく記帳する。それとともに、彼はかかる自己の生活形象を矯正する無数の戒律をも同時に課定した。

たとえば、「女性の社会を社会生活のやむをえない不快としてながめ、能うかぎり遠ざかるべし、……實際われわれに肉欲、柔弱、万事万端における浅慮浅薄、その他もろもろの悪徳を与える点において、女性にまさる有罪者があるだろうか。」^⑪——と彼は設問する。彼のこの＜女性より遠ざかるべし＞という規律は、「現代のごとき淫佚放肆の時代においては、女性は男性より劣

悪なのである。』^⑭——という認識をふまえたうえのものである。一方、この悲劇的認識は、「女性
は男性より感受性がつよい、したがって淳風美徳の時代においては、女性は男性よりすぐれて
いる。』^⑮——という叙事詩的なイメージにおける女性像の反指定として導かれている。

彼はこうして、淫佚放肆の時代を淳風美徳の時代からするどく截断する。彼はこの時代の断層
に、自己の悲劇的な巨体をよこたえることによって、断層そのものを埋めつくそうとした。この
一事のほか、彼の未来への、生への出口はなかったのである。またかかる意味において、彼は
＜いまの自分を導きだしてくれるであろう志向と基盤＞を淳風美徳の時代に求めたのである。ま
さに彼は、現代と歴史的過去の深淵の間に、創造によるかけはしを組みたてる作業を通じて、今
日の自分の生き方を定型化しようと試みたのだ。この彼の自己の定型化への志向は熾烈な祈り
にも似ている。^⑯

トルストイにおける青春無頼への訣別と自己のあり方の定型化には二つの面がみられる。一つ
は、社会的＝経済的な活動分野において、家父長制的、自足的な共同体、地主と農民が協調関係
にある世界を実現するため、そのあらゆる可能性を実践的に追求することであった。いま一つは、
道徳的＝精神的な分野において、自己を全人類的な人格へと完成させ、この完成への道を万人が
歩みうることを自己において実証することであった。

彼は社会的実践に幻滅する時点において（たとえば『地主の朝』）、道徳的完成の可能性（た
とえば『コサック』）に出口をもとめる。理想の女性像とは別に、この幻滅と希望のはげしい反復
は、すでに『アンナ カレーニナ』以前の作品におけるトルストイの主人公の性格にも特徴的
である。トルストイの生涯にとって記念碑的な全作品史を一貫するかかる自伝的主人公の精神的激
動は、トルストイ自身が自伝的過去の始源にそびえる、あの＜微笑の美しい＞世界の幻想に代え
うる他のいかなる貴重な幻想をも持ちえなかったことによるものである。

彼の創作活動は、すべてをあげて、この幻想を現実化しうる可能性の探求に向けられた。彼は
自伝的過去から、さらにナポレオン戦争を背景とする時代史的過去へさかのぼり、そこに自己の
幻想の基盤を発掘することによって、この可能性の経済的・社会的・道徳的基盤を拡大鏡にかけ
て検証しようとした。

ロストフ伯爵家の家庭形象は＜ママン — ナターリヤ＞的な家庭形象の一層の拡大であり、ま
たここでは、農奴制度それ自体も完全にその＜醜い顔＞をひそめている。プラトン カラターエ
フは＜地主が裕福だから、百姓暮らしは幸福だった＞と語る。これは、なんと農奴制ロシアの経験
則と背馳することか。

彼がこの時代錯誤にも臆することのなかった最大の理由は、彼が道徳的自己完成を通じて、幸
福な過去に始源をもつ理想郷の精神生活に復帰しうる可能性を信じるとともに、この理想郷にお

ける社会的基盤を、同時代のロシアの現実に、農村経営の実践活動を通じて回復しうる可能性のあることを信じて疑わなかったからである。トルストイはこの信念にもとづいて、『戦争と平和』のエピローグに二つの論争的テーマを敷設した。

第一の論争的テーマは、同時代の自伝的主人公ピエールが、デカブリスト的な農奴解放思想にちかづくことを、『戦争と平和』の全イデオロギイ的帰結とする作者の意図にみられる。トルストイのこのテーマは、彼が1861年の『農奴解放詔書』に対する抗議文として書きとどめた『貴族階級に関する手記』^⑤を素材としている。彼は、過去における貴族選良の反権力的な農奴解放思想とその実践にふれつつ、自己を苦悩するすぐれた貴族階級の最後の一人であると規定する。

彼は、アレクサンドル二世の詔書が、＜貴族階級が当然いdauerであろうと思われた不満と憤激のかわりに、貴族階級に心からなる歓喜をもってむかえられた＞現状をくかかる重大な時期にあたって、これは何という笑劇だ！＞と痛罵する。＜このような詐欺的なやり方で解放事業がつづけられるかぎり、上からでなく、下からの革命にまで、われわれをつれていかない＞という保証はない——と彼は檄する。彼の檄文の熱情的なパトスは、＜農奴はその耕作している土地とともにでなければ解放できない＞、しかるに＜第二の偉大なピョートル一世を夢みるアレクサンドル二世は、……そのためのあらゆる可能な手段を避けている＞——まさにこの点に触発されている。

トルストイは、ピエールをしてくまやかしの解放＞を断罪する道にたちむかわせる一方、＜解放のあらゆる可能な手段＞として、自己の社会変革の雛型をくロストフ伯爵家——カラターエフ的農民＞の共同体に擬している。エピローグにおけるロストフ家の長男ニコライは、営々孜々として、カラターエフの＜裕福な地主＞となることに努めている。

第二の論争的テーマは、50年代末—60年代にかけて、進歩陣営から提起された女性解放思想に対する反論を、自己の社会変革の実現における理想的女性像によって、体系化することにあつた。彼は＜多産な牝＞と変貌したナターシャの家庭生活にふれて、たとえば次のように闡明する。

「女性の権利や、夫婦の関係や、両者の自由と権利などについての解釈や論議は、現在のように、まだ問題とこそされてはいなかったが、当時も、現在とまったく同じようにあつたのである。……こういう問題は、結婚というものに、夫婦がたがいに与えあう満足のみを、つまり結婚の一面のみを認め、家庭の中にある結婚生活全体の意義を認めない人々にとってのみ存在していたのである。」^⑥

3

トルストイは、自己の全存在を未知の力の脅威の渦中にゆだねつつも、社会的・道徳的プログラムの遂行において、現代のあらゆる悪徳を最終的に排除する道にたつことを、自己の使命とし

て定型化した。

しかし、『アンナ カレーニナ』がその成立の苦しみをあわせもつ70年代初頭には、すでに未知の力がロシヤ社会の全域にわたり、その決定的な支配力を強めていた。61年における農奴解放も、この未知の力が予定したコースにはかならなかった。

トルストイは『戦争と平和』のエピローグにおいて、歴史的諸事件を寄せては返す波にたとえ、宿命と輪廻の哲学によって、歴史的必然性に逆行する自己の変革コースを擁護した。しかし、未知の力の腐蝕的な支配の前に、トルストイの規定する前近代的な社会形態への変革コースは、その決定的な破産性の宣告をしいられる。それは無残に敗退する運命以外に、なんの発展的成果をもロシヤの現実にもたらすものではなかった。

悲劇『アンナ カレーニナ』は<一切のものがひっくりかえり、それがやっもとどおりになりつつある>時代、すなわち農奴解放後のロシヤ現実を舞台としている。ここでもトルストイは、<一切のものをひっくりかえした>力を、未知の力であると承認することを断固として拒否している。それは貴族階級の大多数が<淫佚放肆の時代>において、完全に道徳的に頹廃したことによる、と彼は考える。トルストイはこのように考える自伝的主人公レーヴィンによって、いま一度、自己の変革コースの検証に希望をつなぎとめる。もしこの検証に成功すれば、<ロシヤの全社会問題はたちどころに解決される>はずなのだ。しかしレーヴィンは、一切のものを<やっもとどおり>に整理しつつある力が、ほかならぬ未知の力であるという認識に生理的な嫌悪を投げつける。こうして彼は、自己の農村経営活動におけるあらゆる辛酸と失意に耐えるだけでなく、いままた、社会変革の理論的著作への没頭において、それと同じ運命的な憂悶にも耐えねばならなかった。彼は幻滅と苦悩の末に、あるいは自殺を妄想する自己の存在そのものとの対決点にまでいきつくほかはなかったのである。

『戦争と平和』ののち、トルストイは『アンナ カレーニナ』の<不貞な妻とそれがもとでおこった家庭の悲劇>^⑩に直行したのではない。彼は、<一切のものがひっくりかえり、それがやっもとどおりになりつつある>時代が、<ピョートル一世の改革時代>と多くの類似点をもつことに著目し、この時代考証のうえに、現代ロシヤ社会の結び目をとく手がかりをえようとした。彼はストラホフに宛てて書いている。

「芸術家にとって、これはなんとすばらしい時代でしょう。目にふれるものがすべて疑問と謎です。この謎をときあかすことは詩文学によってのみ可能です。そこにはロシヤ社会の結び目があります。しかし、——とすぐあと彼はつづけている——私の準備からはなにひとつ生みだせそうもない気がします。すでに私はあまりにもながいあいだ、（現代の群像に時代の）着つけばかりしていたので気持ちがぐらついています。もし、なにひとつ生みだせないようなことになれば悲

しいことです。」（書簡：1872年12月17日）

ピョートル時代に取材する歴史小説は中絶をよぎなくされた。作者がこの作品の挫折の過程につづる悲しみは、未知の力の決定的な影響支配のもとで、すでに現代の貴族階級がピョートル時代の性格を完全に喪失していることの悲しみに通じている。トルストイは彼等から、美しき良き日の歴史的衣裳をあらためてはぎとらねばならなかった。^⑩

ピョートル時代の小説のもっとも初期の草案の一つには（No. 7）＜皇帝^{フシヨ}の家庭^{スノシヤーロシ}ではすべてが^フ混乱^{ツァーメルスコイ}していた^{セミエ}>という書きこみがみられる。この一句は、その場で抹消されはしたが、やがて『アンナ カレーニナ』の冒頭の警句をうけて、＜オブロンスキ^{フシヨ}家^{スノシヤーロシ}ではすべてが^グ混乱^{ドメ}していた^{オブロンスキフ}>という形で復元されている。

従来『アンナ カレーニナ』の成立過程をめぐる、歴史的テーマから家庭的テーマへの作者の突発的な転回という表面上の理由から、いくたの憶測や伝説^⑪がとりざたされてきたが、上の一例は、両者のテーマの内面的親近性をつける好個の材料となっている。トルストイは『戦争と平和』においても、歴史的＝国民的テーマを直接に創造の動機としたのではない。家族とともにシベリヤの流刑地からロシヤ内地へ帰還したデカブリスト・ラバーゾフの家庭生活が父と子の世代の対比のうえに、つまり自由主義な子の世代を批判的に描く意図をもった長篇小説の構想が、しだいに変遷していく過程において成立をみているのである。^⑫ 換言すれば、＜かくあるべき世界>における＜かくあるべき女性>ナターシャを中心とする家庭的なテーマが、必然的に歴史的テーマと結びつきを確保していったのである。トルストイにおける私的な生活は、作者の主体的姿勢からして、つねに国家的＝全人類的規模における歴史生活と同じ中心をもつ同心円の関係において描かれねばならなかったのだ。まさにこの理由から、叙事詩的に展開される私的な生活は、それが、その自然の帰結として幸福であることによって、いかに時代錯誤^⑬のそしりをうけようと、この時代錯誤の精神こそ、同時代の非詩的な現実を、鏡にかけてあばきだすことができたのである。

トルストイは、70年代初頭の『アンナ カレーニナ』において、壮年時代の自伝的主人公レーヴィンを登場させつつ、彼の改革事業への一国的な規模における幻滅の苦悩を通して、直接に非詩的な現実——未知の力と衝突をくりかえすのである。

＜レーヴィン — キティ>の家庭生活は、動乱過渡のロシヤ転換期におけるトルストイの社会的幻想の悲劇性を一身に体現した。もはやキティは、豊かな国民的天性をひめた女丈夫ナターシャにくらべて、一介の散文的な地主の妻にすぎない。一方、この時代の貴族的苦悩者レーヴィンは、アンナの個人的悲劇を、一国の悲劇的運命として体験するのである。彼は社会変革理論の著述家であり、たんなるニコライ的地主ではない。＜幸福な家庭>における＜多産な牝>ナターシ

ャが、十分ねづよい国民的支柱を保持するピエールとともに、彼が志向する正義と理想の証言台にたちえたのに反し、キティはもはや、レーヴィンの苦悩や幻滅の源を理解する共同者とはなりえていない。キティよりむしろ、いわば人間性の尊厳において、妥協なく自己の個人的悲劇にむかって突きすすむアンナが、ナターシャの具備する豊かな感性を潜熱としてひめていること——これが悲劇『アンナ カレーニナ』におけるアンナとレーヴィンの対立的なプロットを、その美学的内容において一つのものに結びつけている秘密でもある。

アンナの悲劇的運命の評価が、^{エピソード}題銘の解釈と相関して、作品全体の美学的問題性を尖鋭化させる理由の一つは、レーヴィン、ひいてはトルストイの最終的なアンナ観が、アンナの像をナターシャの像に、ある意味で親近化させていることによる。＜幸福な家庭＞から＜不幸な家庭＞へのテーマの移行にもかかわらず、作者トルストイの論争的意図が、かつて『戦争と平和』のエピローグに敷設された女性解放問題に対する批判的見解を、アンナの形象創造の歴史において展開させている事実注目するならば、上の問題のありかを探る一つの手がかりとなるだろう。

4

50年代の最後の年に書かれた『家庭生活の幸福』には、はやくも女性問題に対する当時の論争の反響がみうけられる。1862年には、チェルヌィシェフスキが『何を為すべきか？』において、恋愛の自由と女性の社会的進出を新しい社会主義的人間像の生活規範として提出した。また同じ年に、ツルゲーネフは『父と子』のバザーロフにおいてニヒリストの形象を創造した。これを契機に、女性問題と新思想は、ロシア文壇・批評界におけるもっとも緊迫した戦闘的テーマの一つとなった。

言うまでもなく、トルストイはチェルヌィシェフスキの『何を為すべきか？』についても、ツルゲーネフの『父と子』についても、強い反感をいだいた一人である。彼はこれらのパロディとして、＜女性解放の思想といわゆるニヒリスト達を嘲笑する目的で＞、『毒された家庭』（1864）という喜劇を二月たらずで書きあげている。

ひきつづき、トルストイは女性問題に対する論争的意図をもって、先に引用した『戦争と平和』エピローグ（第2部 第10章）の＜女性の本分＞に関する特別の考察を書いたのである。この章の草稿の一つは、独立した論文ではないが、記念全集において『結婚と女性の成長について』^②と仮題が副えられていることをみてもわかるように、決定稿よりも詳細にわたって、この問題の哲学的考察に費やされている。これは、ツルゲーネフのアウエルバッハの小説『ライン河畔の別荘』に寄せた序文の批判として書きはじめられたものと思われる。

ツルゲーネフは、アウエルバッハの作品解説として、その姉妹作『あの教授の恋』を引用しつ

つ、ほぼ次のようにのべている。

いかなる女性を生涯の伴侶に選ぶべきか。これは、結婚してみないとわからぬ複雑で神秘的な問題だ。だから結婚生活にはあれこれとトラブルがつきまとう。このトラブルをいかに解決し、夫婦を和解へと導くか——これがアウエルパッハ氏の小説の主題で、結婚問題のありかが実に深く究明されている。

これに対するトルストイの反論を要約すると——結婚生活に複雑で神秘的な要素はない。このように考える男は結婚の相手を幾度もとりかえたいと思っているにちがいない。かかる男性は一個の家庭も満足に営む能力をもたぬ。結婚の目的は子供を産むことにある。子供には健全な家庭生活を営む父母の感化が大きい。結婚生活のトラブルは、妻をとりかえ、夫をとりかえることで解決されるものでない。

トルストイはこの思想を展開しつつ、インテリ女性や女性解放論者、女性の使命について書かれた社会科学書を非難の対象とする。彼は、彼の作品を読む女性の読者にさえ嫌悪をいだく。つけて次のように書いている。

「人間の価値は、それがいかようのものであれ、才能や知識を有していることにあるのではない。人間が自己の使命をまっとうすること以外に、人間の価値はありえない。男性は、人間社会という巣箱の中の働き蜂であり、その使命は多岐にわたっている。だが女王蜂である女性の使命は、彼女なしには種の維持が不可能であるから、疑いもなくこの一事にかぎられる。それにもかかわらず、女性はしばしば自己の使命を忘れ、贅のものととりちがえる。だが女性の価値は、この唯一なる自己の使命の理解にある。自己の使命を理解した女性は、卵をかえすことにのみとどまってはいけない。彼女が自己の使命をわきまえること深ければ、ますますもってこの使命が彼女の全生活をとらえ、彼女には、この使命が果しなきものと思えるようになるだろう。」

トルストイが『戦争と平和』を脱稿しおえた年に、同時に二軒の出版社から、J・S・ミルの『The subjection of women』^⑧ が翻訳刊行されている。これらの訳書には、H・ミハイロフスキイはじめ、二、三の批評家が序文を書いている。この出版は翌年に版を重ねるほどの好評をもってロシア読書界にむかえられた。しかし、ネオ＝スラヴ派のストラーホフは機関誌《ザリャ》によって、この書および序文執筆者に反駁をくわえている。(1870, No. 2)

「わが悲しむべき時代においては、……現存する秩序や見解に疑惑をなげかけることがはやっているばかりか、それが賞讃されるべき功績だとまで考えられている。女性問題もその一つであるが、ロシアにおいてはこのような形で女性問題をとりあげることは許されない。なぜなら、ロシアの女性は、イギリスの女性にくらべて、法律的によりよく保護されているからである。そのうえ、ロシアの大多数の家庭の子女は、英語をおしえこまれている。これは、フランスが情事の

古典的な国柄であるのに反し、イギリスが純潔な家庭道德の古典的な国柄であり、ロシヤの子女がイギリスの小説をよんで、志操堅固なイギリス女性をみならわんがためにである。一体ミルの解説者達はこの事実をどう考えているのだろうか。」

ストラーホフは次のように自己の見解をしめくくっている。

「結婚した女性の生活の大部分は、家庭の主婦として、母としての単純な義務におわれ、家庭以外のことに気をちらすいとまがない。女性の政治的権利云々の論は、これでわかるように、オールド・ミスや、子供が成人して家庭への配慮の必要がなくなった年輩の婦人だけに言うことである。つまり、女性という性をすでに喪った婦人にかぎって、社会的事業への参加もゆるされよう。ミルの著作は、法律的問題にのみかぎられていて、かくあらねばならぬ女性の理想像とか、夫婦の愛情の機微などについては一言もふれていない。……だが一体、こうした性的な相異が男女間になければ、女性問題などがことさらにおこるべきはずもないではないか。異性間の関係こそ、神秘的な多くの意味をひめている。この関係こそ、最大の幸福と最大の不幸の源である。あらゆる魅力、あらゆる醜怪は、この両性間の関係から生じる。生活の美醜は、本質的に、男女の関係によって規定される。これこそが生活の真の結び目である。そしてミルはこの事実をみおとしている。」

『戦争と平和』が、^{アナクロニズム}進歩陣営から時代錯誤の非難をあびたとき、ストラーホフは好意的な批評によってトルストイを援護した。^②トルストイはストラーホフとまだ面識の機会をもたなかったが、彼のこの論文に接して、手紙を書こうと思いたつ。彼はストラーホフの結論に＜双手をあげて賛成だ＞と書いた。賛成の主旨を書いているうちに、いつのまにかトルストイの論鋒はストラーホフにも向けられる。彼は、ストラーホフが女性の社会的権利の否定にある譲歩を認めたこと、つまり＜性を喪った女性＞の社会的権利を保留したことに論駁の鋒先を転じている。^③

「四本足の人間がいないように、性を喪った女性というものは存在しない。女として生れたにもかかわらず、夫をみだしえなかった女性も女性にかわりはない。ミルが約束するような人間社会ではなく、アダムとイヴにはじまる人間社会を念頭におくならば、生れてはきたが配偶者をみだしえなかった女性が、いかなる仕事にたずさわるべきかの問題は自明であり、あれこれ考える必要はすこしもない。こうした女性に対する需要は、昔も今もつきせぬほどある。それは、産婆、乳母、家政婦、それに売春婦といった仕事である。」

トルストイがかかる女性の職業として、産婆や乳母と同列に、売春婦をもならべたてたことは、いささか妥当性を欠く憾がある。彼のこの逸脱は、また一面において、徹底した土地貴族的世界観の偏狭さを露呈したものともしうけとれる。この点について、トルストイは次のような説明をつけたしている。

「売春婦のたすけをかりずに、家庭生活が維持できるのは、草深い田舎においてのみ可能である。またこの意味で、若いうちに結婚し、一步も家庭をそとにしない土地所有者のみが、妻に誠実であり、妻もまた夫に貞節である。ところが、草深い田舎とはちがって、大都会の複雑化された生活機構の中では、売春婦の出現はいたし方のない必要悪である。この悪は、自由主義者達が欲しているように、夫や妻をとりかえることによって解消すべくもない。いや、それこそ家庭の破壊である。売春婦は、妻や家庭の子女を純潔に保つために必要である。ロンドンにもし、8万人の売春婦がいないと、どんなことになるだろう。……」

こうしてトルストイの手紙の内容は、当初の意図から次第にそれていった。あるいはそれを完全に裏切ったともいえる。しかしながら、この裏切りにおいて、トルストイの女性問題への関心のほどがあますところなく伝えられている。これはもはや、一面識もない相手に送る手紙というよりは、挑戦的な論争の提起である。結局トルストイは、この手紙の発送をさしひかえた。

ストラホフのミルおよびミル追隨者批判論文に、トルストイが基本的に賛成であったことは言うまでもない。しかし、このことだけが、ストラホフへの手紙に彼を駆りたてたとみるのは早計である。ピョートル帝時代にロシア生活の結び目を想定した彼が、ここに創造的探究の根をおろしえずに苦悶していたことを考えあわすならば、＜両性間の関係こそ、生活の真の結び目で、生活の美醜は、本質的に、あげてこの結び目にかかっている＞というストラホフの言葉に、なにかの意味で示唆されるところがあったにちがいないからである。

しかし、ストラホフのこの言葉は、トルストイにとって、ことさらまあたらしい思想ではなかった。彼は同じ思想を、ショペンハウエル『意志と表象としての世界』からすでに読みとっていたと推定されるからである。

トルストイは、1869年の春から秋にかけて、『戦争と平和』エピローグ第二部を、歴史に対する哲学的考察で埋めようと試みていた。彼がショペンハウエルに傾倒したのはちょうどこの時期にあたる。

ショペンハウエルは、男女間の問題について、ストラホフよりはるかに鋭い考察をなしている。^⑤——「性愛が重要な役割を演じるのは、戯曲や小説のなかばかりでなく、現実生活においても、強力で積極的な役割を演じる。それは……ほとんどありとあらゆる人間思考の究極の目的をなしている。なぜなら個体の意志が、全種族の意志として、この高等な資質のなかにあらわれているからである。したがって恋愛関係の高等な仕組みや感激、恋愛の歓喜や苦悩は……小説のテーマとして、これにまさるものはない。恋愛のテーマこそ、種族の歓喜や悲哀の表現である。と同時に、個々人の幸・不幸に関係する他の諸々のテーマとも密接なかかわりをもつテーマである。……このテーマは汲めどもつきぬ詩文学の泉である。」（傍点は引用者による）

＜恋愛のテーマこそ、種族の歓喜や悲哀の表現である＞——この思想は、ピョートルを先頭とするロシア貴族の種族的な歴史小説から、＜不貞な妻をめぐる悲劇＞という形式をとる恋愛小説への転回を、転回としてではなく、両者が小説の内容と規模において共通するものであることを、そのあらゆる妥当性において証明するものであった。

ショペンハウエルはつづいて次のように結論する。——「夫婦間の誠実さは、男性においては作爲的な性格をもっているが、女性においては自然的な性格をもっている。したがって女性の姦通は、客観的にも主観的にも、男性のそれに比して、はるかに赦しがたい。」このショペンハウエルの思想をにおいて、アンナの悲劇的構想の内面的胚芽を考えることはまず不可能である。

5

聖書のロシア語訳にしたがえば『アンナ カレーニナ』の題銘は^{エピソード}《Мне отмщение, и аз воздам》と表記される。しかしトルストイがこのような表記において作品に^{エピソード}題銘を付したのはのちのことである。初期のバリエーション(1873)には＜Отмщение мое＞とのみ覚え書的に略記されている。福音書のこの金言は、聖書のスラヴ語訳、ロシア語訳において、かかる語順で綴られたためしがない。この点についてエイヘンバウムは、『アンナ カレーニナ』の^{エピソード}題銘が、聖書からでなく、ショペンハウエルの著作から借用されたものであるという仮説を発表している。^②

ショペンハウエルは『意志と表象としての世界』の一節（§62）で、罰と復讐の概念を規定している。彼は＜国家以外に罰の権利は存在しない＞ことを力説し、罰が復讐とことなる点は、罰が未来に向けられた予防であるのに反し、復讐はただ過去に向けられ、かつて行われたことに動機づけられている、したがって、「復讐以外の目的なしに、悪をもって悪に報いるのは、道徳上はもちろん、そのほかいかなる理由によっても是認しえない。……聖書にも言っている《復讐は我にあり、我これにむくいん》と。」

ショペンハウエルの著作に深く傾倒した時期に、トルストイは親友である詩人のフェートに、『意志と表象としての世界』の訳出をすすめている。フェートによる訳書の初版がでたのは1881年であった。トルストイがショペンハウエルの著作を原書で読んだのは当然である。ドイツ語のテキストにおける金言は、《Mein ist die Rache, spricht der Herr, und ich will vergelten》と表記される。トルストイはドイツ語の金言の書きだし＜Mein ist die Rache＞を、そのままロシア語に直して＜отмщение мое＞としたのではなかろうか——これがエイヘンバウムの仮説である。

エイヘンバウムのこの借用説をうらづける間接的な資料の一つは、先に引用したストラホフ宛のトルストイの未発送書簡である。ロンドンにおける売春婦人口に関する一条は、疑いもなくシ

ヨペンハウエルを下敷にしている。これはシヨペンハウエルの『女性について』（第2巻第27章）のなかからの借用である。しかし、借用は別として、売春婦を是とする両者の見解には根本的な相違がみられる。シヨペンハウエルがこの必要悪の根元を＜西欧の一夫一婦制＞社会の矛盾にみたのに対し、トルストイは＜複雑化された近代都市生活＞の矛盾にみているからである。

ところで、初期のバリエーションにおける＜Отщепенное мое＞という走り書は、いかなる動機によってあらわれ、いかなる意味において解釈されるべきか。

トルストイは、『アンナ カレーニナ』の構想をはじめて家族に公表した1873年3月に、T・A・クズミンスカヤに宛て、A・デューマ二世の時事評論『L'homme-femme』についての読後感を伝えている。^⑧「この著作はとても私の胸をうちました。結婚および女性に対する男性の態度一般について、かかる高尚な理解をフランス人がもちうなどとは想像もしえなかったことです。」——と彼は書いている。

デューマのこの評論は、晋仏戦争後のフランス・ブルジュアジイに特徴的な道徳的頹廢に関する問題をとりあつかっている。デューマの所説によれば、女性は下等な存在で、浅薄な好気心のかたまりである。彼女の心にはつねに変節がひめられている。この彼女を救済する場所は家庭のほかにない。夫は彼女に精神的にはたらきかけ、訓育し、できるかぎり過ちをゆるしてやらねばならない。だが、夫がいかに誠意をつくして訓育にあたっても、いかんともしがたい女性が存在する。かかる女性は殺されねばならない。デューマは結論として、息子への呼びかけの形で次のようにのべる。

「もしお前の忍耐と善意にもかかわらず、彼女が母性となることによって、おのが罪障を償い、救済の道を歩まぬようであれば、お前は自分が審判者を名乗り、この女性の刑吏となれ、これは、もはや女性ではなく、美しく粧った動物である。カインの雌である。この雌をお前は殺さねばならない。」

＜カインの雌、殺すべし＞——このデューマの結論が、＜不貞の妻をめぐる悲劇＞の構想をあきらかにした前後の時期におけるトルストイに、強い衝撃をあたえたであろうことは想像にかたくない。これを裏書するように、初期のバリエーションには、デューマの所説をめぐる、女性教育に関する論争場面がしつらえられている。^⑨

進歩派を自認する大学生ペスツォフはミルやそのロシヤでの解説者の言葉をかりて、女性の権利を擁護する。ローフスキ（のちのレーヴィン）は彼に論争をいどむ。彼はそのあげくに、デューマの思想を支持し、不貞の妻は殺されねばならぬと叫ぶ。しかし、そのあとにすぐ次のように書きこまれている。「この言葉は、その場のなりゆきで、やむをえずそうなったので、実は彼にも信じられないことであった。」と。

トルストイの〈Отыщенье мое〉という走り書は、〈不貞の妻、殺すべし〉というデューマの命題に対するあきらかな不審である。トルストイはショペンハウエル^{エビエグラフ}の著作から福音書の金言を転写することによって、不貞な妻といえども、神をおいて〈誰にも罰する権利はない〉という自己の回答をデューマの命題に対置させたのではなかろうか。

しかし、このことは、デューマの女性観、家庭観に、トルストイが反対していたことを意味しない。むしろその逆である。トルストイは〈殺すべし〉以外のすべてのデューマの所説の心底からの賛同者であった。その最大の理由は、彼がすでに青年時代から、誰の影響をもうけることなしに、現代の女性を〈悪と欠陥の肉化〉とみなし、〈遠ざかるべし〉の規律を課定していたこと、またデューマの女性観が、女性の権利問題、その社会的・法的地位についてはふれずに、結婚、家庭、男女問題のモラルにかざられていたことによる。デューマの命題に対するただ一点のトルストイの反駁は、〈性を喪った女性〉に関するストラホフの譲歩への反論、売春問題に関するショペンハウエルとの理解における確執と、同じ部分的否定の性質をもっていた。そしてまた、この部分的否定の異常な激しさとその論拠が、いかにトルストイ的であり、トルストイの面目を躍如たらしめているかは先にふれたとおりである。

6

『アンナ カレーニナ』のいちばん初期のバリエント（1870）において、トルストイは、最高の上流社会に所属する〈身をもちくずした人妻〉を、〈つみ人としてではなく、憐れむべき女性として〉描きたいと考えていた。

デューマの著作に刺戟された新しいバリエント（1873）では、彼女は〈夫の社会的活動と家庭を破壊した嫌悪すべき女性〉となっている。福音書に出題する題銘^{エビエグラフ}が、先にのべた経過をたどってあらわれたのもこの時期である。しかし、この〈嫌悪すべき女性〉に対する裁き、罪の報いとしての罰は、デューマの〈殺すべし〉というテーゼと鋭く対立した。

〈不貞の妻〉アンナの形象は、執筆過程をおって、さらに複雑な変化をとげている。アンナは〈嫌悪すべき女性〉から反転して、〈不幸な悩める女性〉、高貴な精神的資質を賦与された女性と変化していく。この変化にもかかわらず、題銘は、謎のようにとりのこされている。アンナの最終的形象が〈悩める女であるが、罪のない女〉として確立したにもかかわらず、^{エビエグラフ}題銘が当初のままであるということは何を意味するのであろうか。この問題の検討は他日にゆずるほかはないが、ここで簡単に^{エビエグラフ}題銘の原典にふれておこう。

『アンナ カレーニナ』における題銘の最古の原典は、旧約聖書（モーセ五書のうちその最後のものである申命記 第32章第35, 41, 43の各節）に出題している。エホバの神がモーゼの民の〈淫

佚放肆>に激怒して天に向って叫ぶ言葉である。たとえば第43節において、「わたしがきらめく剣をとぎ、手にさばきをにぎるとき、わたしは敵に仇をかえし、わたしを憎む者に報復するであろう。」と綴られている。申命記における意味上の重点は<仇と報復>におかれている。

ショペンハウエルからの転写における新約聖書に出題する金言は、申命記の再録である。「愛する者たちよ、自分で復讐しないで、むしろ神の怒りに任せなさい。なぜなら、≪主が言われる復讐は私がすることである。私自身が報復すると≫。』福音書（ローマ人への手紙）における意味上の重点は、申命記とちがって、あきらかに<我に>と<我は>におかれている。

『アンナ カレーニナ』の題銘の意味を、作品の美学的内容とつきあわせて、いかにうけとめべきか——この問題については稿をあらためて考えてみなければならない。

いまここで指摘できることは、作者の転機後に書かれた短篇『蠟燭』（1885）の最初の表題が≪復讐は我にあり、我これに報いん≫とされていた事実である。

百姓が寄りあつまって、あくどい差配人を殺そうと相談する。そのうちの一人が、殺すべきでない、と仲間を説得する。「他人をあやめることはたやすいもんだ、だがなあ、自分をあやめることはどうだろう？ 悪によって悪をおっぱらう、それが神さまのおぼしめしなら、せんかたないけれど、それならそれでちゃんとそう書かれているはずだわい。やりたけりゃ、お前がたが悪とやらを追っばらうんだ、けんど、その悪ちゅう奴が、こんどはお前がたの体にのりうってしまうぞお。」

差配人は、結局ひとりでに破滅する。彼は神によって罰せられたのだ。この場合の福音書の表題は、あきらかに<暴力による悪への無抵抗>理論の単純な図解にすぎない。これは一種の譬話である。

60年代以降におけるフランス・ブルジュアジイのイデオログ＝モラリストとしてのデューマも、これと同じことを試みている。彼は<カインの雌、殺すべし>の絵解きとして、『クラヴジーヴィの妻』^⑥という戯曲をものした。

あるドイツのスパイが、フランスの有名な物理学者の妻にいいより、彼女を肉体的誘惑の罠にかけて、夫の発明にかかる新兵器の秘密を盗もうとする。夫はことの真相をかぎつけて、妻を殺す——というのがその筋書きである。

トルストイは『アンナ カレーニナ』の題銘^{エピソード}をデューマの<殺すべし>のテーゼと論争的に対置した。これは事実である。しかし、それは、悲劇『アンナ カレーニナ』が、転機以後の短篇『蠟燭』におけるように、^{エピソード}題銘のたんなる図解と化すものでなかったこともまた事実なのである。

作品の美学的内容^{エピソード}と題銘との間に正しい解決をみいだすこと——これこそ悲劇『アンナ カレーニナ』全体をいかに評価するにかにかかわる重要な結び目である。

- ① 『幼年時代』第2章《ママ》—微笑に関するトルストイの抒情的逸脱の意義に注目すること。
- ② 『狂人の手記』記念全集 (26, 446—467)
- ③ Robert Browning (1812-1889)《PIPPA'S SONG》—<All's right with the world!>
- ④ (注1)と同じ。
- ⑤ 『幼年時代』第27章《悲しみ》, 第28章《最後の悲しき思い出》参照
- ⑥ 日記 (1851—1—17)
- ⑦ 日記 (1847—3—17)
- ⑧ 日記 (1847—4—17)
- ⑨ 日記 (1851—2—28) および《生いたちの四つの時代》 第1 バリエーションにおける手記風の告白—記念全集 (1, 103)
- ⑩ 『コサック』参照
- ⑪⑫⑬ 日記 (1847—6—16)
- ⑭ 日記 (1851—6—2) <もし祈りを数願ないし感謝と定めるなら, 僕は祈りはしなかったのだ。僕は崇高な, 立派な, なにものかをのぞんでいたのである>
- ⑮ (1858—12—13) から《貴族階級の問題に関する手記》を書きはじめている。本文は<誰にもみせず
に全部焼かれた>が, その草稿が保存されている。記念全集 (5, 267—270)
- ⑯ 『戦争と平和』エピローグ第2部 第10章
- ⑰ С. А. Толстухинаの妹にあてた手紙 (1873—3—20)
- ⑱ 記念全集 (17, 639—640)
- ⑲ たとえば, トルストイの伝記作者 П. И. Бирюков は, それらによって成立史をあとづけようとする。
《Л. Н. Толстой, Биография》Т. II, Берлин 1921 (211—225)
- ⑳ С. П. Бячков; Роман «Война и мир» Л. Н. Толстой, сборник статей М. 1955所収 (162—164)
- ㉑ Н. Н. Гусев, Лев Николаевич Толстой (1855-1869) А. Н. СССР М, 1957 Гл. XIV
- ㉒ 記念全集 (7, 133—135)
- ㉓ 1) 『女性の隷属状態』 (Н. Михайловский, 翌70年には М. Шебрильков-Ваが序文をかく。)
2) 『女性の隷属について』 (序文, Г. Брагосветров)
- ㉔ (注21) 参照
- ㉕ 記念全集 (61, 231—232)
- ㉖ 『意志と表象としての世界』第2巻《種族の生活》《性愛の形而上学》
- ㉗ Б. Эйхенбаум; Семидесятые годы. Л., 1960 (201—202)
- ㉘ Н. Н. Гусев; Летопись (1828—1890) 402
- ㉙ 記念全集 (20, 338)
- ㉚ この戯曲は『スパイ渡世』と銘うって, 『アンナ カレーニナ』の脚色上演とほぼ同時に, ロシアの二, 三の劇場の上演目録にも名をつらねている。